

【外題】

里見八犬傳 肇輯 卷二

【本文】

南總里見八犬傳卷之二

東都 曲亭主人編次

第三回

景連信時暗に義實を阻む
氏元貞行厄に館山に従ふ

却説安西三郎大夫景連は、近習のものゝ告るを聞て、結城の落人里見義実、主従三人水行より、こゝに来れる緯の趣、大かたは猜しながら、後難はかりかたければ、速には回答せず。麻呂信時を見かへりて、「如此々々の事になん。何かと思ひ給ふやらん」と問を信時聞あへず、「里見は名ある源氏なれども、こゝには縁も好もなし。無二の持氏がたなれば、結城氏朝に荷擔れ、籠城三年に及ぶものから、京鎌倉を敵に受ては、命を豫てなきものと、思ふべき事なるに、落城の日に及て、親の撃るゝをも見かへらず、阿容々々と逃かくれ、こゝらわたりへ流浪たる、とるよしもなき白徒に、なでふ對面し給ふべき。とく追退け給ひぬ」と爪弾をして説諭せば、景連且く頭を傾け、「某もさは思へども、用ふべきよしなきにあらず。彼等は三年籠城して、戦には熟たるもの也。義実年なほわかしいふとも、数万の敵軍を殺脱すは、いかにしてこゝまで來べき。召入れて對面し、その剛臆を試みて、使ふべきものならば、定包を討一方の、大將を得たりとせん坎。又使ふべきものならずは、追退るまでもなし、立地に刺殺して、後の禍を禳ひなん。この議はいかに」と密語ば、信時しばゝうち點頭、「微妙はかり給ひにけり。某も對面すべきに、準備し給へ」といそがせば、景連猛に老鷹を召よして、簡様々々と説示し、武藝力量兼備たる、壮士等に謀を傳させ、只管にいそがし立れば、信時も又、俱したる、家臣等を召のぼして、その緯のこゝろを得させ、あるじ景連もる共に、客房にぞ出たりける。その緯の為体、をさゝ武を張り、威をかゞやかして、安西が家臣廿人、麻呂が従者十餘人、兇いかめしき打扮して、二帯に居ながれつゝ、飾立たる数張の弓弦は、壁に画る瀑布の如く、掛わたしたる鎗雜刀は、春の外山の霞に似たり。廊には幕を垂て、身甲したる力士、十人あまり、すはといはゞ走り出、かの主従を生拘んとて、おのゝ手獵索を引てをり。

さる程に、里見冠者義実は、外面に立たすむ、既に半晌あまりにして、こなたへと召入られ、ゆくこといまだ一室に過ず。衝立の紙盾の蔭より、縹緹の麻の上下したる、壮士四人立見れ、「誘給

へ、俺們案内つかまつらん」といひあへず、前後に立ながら、半弓に箭を刺て、きりきりと弯しほれば、些後れて従ふたる、枚倉堀内これを見て、吐嗟とはかりもる共に、走りすまんとする程に、又おなじほとりより、息小袖に玉禰掛て、袴の股丈高く取たる、鞍兵六人走出て、短鎗の尖頭突揃へ、先なるは皆背をまに、あるきながらぞ送り去。しかれども義美は、騷きたる氣色なく、「こはものしき歎待かな。三年以来結城にて、敵の矢面に立し日もあり。鎗下を滑脱しはいく遍といふことをしらねど、海より外に物もなき、こゝには却波風騒す、良賤無異を染むと聞しには似ぬものかな」とひとりこゝの主人の後方なる、老黨も立とまり、「治るときにも乱を志れず、小敵と見て侮らずと、兵書に本文ありといふとも、三人に過ぎる主従へ、鐵のかぶらの鬘に、弓弦の索麩、異なる響應、あるじの刀禰の手料理を、亦復實味つかまつらん、談案内を」といそがして、送られてゆく主従は、はやその席に臨しかば、壯士等は弓を伏、鎗を引提て東西なる帷幕の内に入りにけり。

當下里見義美は、景連信時を遙に見て、匠も媚る氣色なく、寶座に著て腰なる扇を右手に置、「結城の敗將、里見又太郎義美、亡父治部少輔季基が遺言によつて、辛く敵軍の囲みを脱れ、漂泊してこゝに來れり。かくれば響が宮屋にも、はかなき今の身を寓て、華洛はさぐら也、鎌倉なる、管領にも従ふる、この安國の現とこになびば、「よなき辛なるべし」と思ひし事はきのふにて、聞くに異なる巷談街説、義に仗て一臂のちからを、竭す事もあらんかとて、思はずも虎威を犯して、見參を乞候ひしに、敗軍の將也とて嫌れず、對面を許し給へば、胸中を盡すに足れり。俱したるは亡父が愛臣、枚倉木曾介氏元、堀内藏人貞行になん。おんめを給はり候へ」と懇勸に名告つゝ、徐やかに見かへり給へば、氏元貞行もる共に、聽て頭を低たりける。

しかれども景連は、思ひしよりなほ義美の、年のわかきに侮りて、うち見たるのみ礼を返さず。信時はあるじをまたで、眼を睜り、声をふり立、「われは麻呂小五郎なり。聊別議あるをもて、けふ平館より來たりしかひに、この席上に連るのみ。さて口さかしく小冠者かな。わが安房は小國なれども東南の盡処にして、三面すべて海なれば、室町殿の武命を受す、両管領にも従ねど、隣國の強敵も、敢境を犯すことなし。さればとて、われはさらせ安西ぬしに、絶て由縁もなき和郎が、京鎌倉を敵に受て、身のおくこゝろなきまゝに、乳臭も失ぬ聲を鳴らして、利書を説んと思ふは嗚呼也。人の落魄を憐むこと、慈眼視衆生佛のごとく、草芥を容るゝこと、無量福壽海に似たり共、誰か罪人をこゝに留めて、その業を招くべき。寔に無益の對面ならん」とあざみ言る頃を、かき拊つゝうち笑へば、義美莞然とうち咲て、「しか言ふはその名聞えし、麻呂ぬしに候哉。

麻呂安西東條は、當國の舊家たり。勇悍武畧をまこぞ、と思ふは似ぬものかな。可惜しきことながら、親にて候季基は、生涯只義の二字を守りて、ながくはたまち難かるべしと、思ふ結城へ籠籠り、京鎌倉の大軍を、三年が間防ぎとどめて、死に臨とも悔しとせざりき。某親には及ねども、敵をおそれ逃もせず、命を惜て走りもせず、亡父の遺言曰ことを得ず、只命運を天に任して、時を俟んと思ふのみ。鎌倉の持氏卿、初世さかりなりし時、安房上総いへばさら也、八州の武士二人として、心を傾け、腰を折、出仕せざるもなかりしに、持氏滅亡し給ひては、幼君のおん為に、家を忘れ身を捨て、氏朝にちからを戮し、結城に籠城したるは稀也。勢利に属人心、憑しげなきものなれば、こゝにも麻呂ぬし、安西ぬし、持氏卿の恩義を思はで、両管領の崇をおそれ、某を容じとならば、袖を拂ひて退りなん。現管領は威權高し。國々の武士隨従ひぬ。おそれ給ふはさることなれども、なごて主従三人に過ぎざる、義実をいたくおそれて、器械拿たる壯士等に誘引せ、當処は安泰無異也、と口にはいへど用心嚴しく、席上に弓箭を掛、劍戟の鞘を外し、刺、帷幕の内、夥の力士をかくし給ふは、いかにぞや」と語られて、信時忽地顔うち報め、安西に目を注すれば、景連思はず大息つき、「いはるゝ所至極せり。弓箭は武士の翼なり。劍戟は爪牙に等しく、身を護るをもて坐臥にも放さず、和殿を威す為ならんや。但し案内せしものともに、器械を拿せし事、力士をかくし置くことは、景連露ばかりもこれをしらす。什麼汝等は何の為に、正なき事をしたるぞや。とく罷出ま」と追返け、飾立たる鎗長刀は、屏風をもつてかくさせけり。すべての準備齟齬て、興の醒るのみなれば、安西麻呂が家臣等は、遠待へ出るもあり、屏風の背に返きて、汗を拭ふも尋かりける。

かゝりけれども信時は、こりずまに膝をすゝめて、義実に向ち對ひ、「今示さるゝ緯の趣、その拠あるに似たれど、敵をおそれず、命を惜す、後運を天に任して、時を俟んと思ふぞならば、坂東には源氏尋かり、なほ身のよるべあるべきに、一國の主にもあらず、好は元來絶てなき、安西氏を憑んとて、船をよせしはこゝろ得がたし。餓たるものは食を擇まず、追るゝものは路を擇まず、敵をおそれ命を惜みて、逃迷すは、いかにして、恥かゞやかしてこゝまで來べき。かひなき身の非を飾らずに、しかならば如此なりと、明々地に告てこそ、憐愍も一トしほならめ。この席上に連るかひに、とり持してまゐらせん。明々地に告給へ。明々地にはいはれずや」と再三たびくり返すを、聞に得堪ず真行は、氏元が袂を引て、もろ共に進み出、「心を師として人をはかれば、打槌もあたらぬ事あり。いと憚あることながら、麻呂大人の推量は、雜兵忝武者のうへにこそ。源氏にはさる大將なし。抑義実命を惜み、敵に追れて途を失ひ、思はず當國に來つるにあらず。偏に先蹤

を追へば也。昔源頼朝卿石橋山の軍敗れて、安房へ赴き給ひしとき、和君の先祖信俊めし、安西の先祖景盛めし、東條ぬしもろ共に、第一番に随従ひ、無二の志をあらはせしかば、頼朝これに先を追して、上総へうち越給ふ程に、廣常常胤來迎て、忽地大軍になりければ、更に鎌倉に基を占て、遂に平家を滅し給ひき。里見もおなじ源氏嫡流、八幡殿の御未なり。かゝる吉例あるものを、あまりに無下におとしめ給ふが、傍いたく候へは、しれたることをまつすのみ。過言はゆるし給ひね」と返す辭も智も勇も一對一致の両老黨に、説伏られて信時は、怒りに逼りて、ものも得いはず。義実はず。

【挿絵】「景連信時義実を威士」「安西かげつら」「麻呂のぶ時」「里見よしさね」「杉倉氏元」「堀内貞行」

氣色を見て、忽地に声を激し、「貞行氏元不礼なせぞ。われいかばかりの徳ありて、頼朝に比んぢ。そは漫也、嗚呼也」と叱り懲らして追返け、勸解す賣る客ぶりに、信時は眼を睜らし、手を叉きて物いはず。景連は肩揺して、堪ぬがごとく冷笑ひ、「あなわが佛尊して、いへば亦いはるゝものかな。里見の従者よく聞かし。頼朝の父義朝は、十五ヶ國の節度使たり。もし朝敵とならざりせば、清盛もすべなからん坎。かゝれば彼卿、流人たれ共、一トたび義兵を起すに及びて、舊恩を思ふ坂東武士、招ざれども属従ひぬ。里見氏はこれと異也。そのはじめ太郎義成、頼朝卿に仕しより、采地一郷の外に過ず、手勢僅に百騎に足らず。中葉は宮方にて、彼此に世をしのびあへず、鎌倉へ降参して、本領安堵したれども、それ將しはしが間にて、今見る所は落人也。主すら口を鉗るに、汝等何の議論あらん。志を改めて、景連に仕へなば、さばかりの事あるべきに、身のほどくをいらすや」と飽まであぢみ誇れども、氏元も貞行も、主のころを汲かねて、再びこれと争はず。

義実はうち微笑し、「安西ぬし意にしか也。しかれども、人の口には戸も立られず。某この地に來て聞くに、何処もおなじ巷の風声、民の誹謗は止ときなけれど、家臣は主君の耳を塞きて、告もせず諫も得せぬは、甚しき不忠ならずや。氏元貞行思ひかけなく、夥の禄を賜ふとも、不忠の人と肩を比、耳の聾たる主君には、仕ぶることを願はじ」といはれて景連氣色を変、「そは何事をか譏りたる。巷の風聞いかにぞや」と問は扇を膝に突立、「いまだ晬給はずや。これは主人のうへのみならず、麻呂ぬしも又しかなり。神餘、安西、麻呂の三家は、舊交尤淺からず、手足のごとく相佐けて、當國久しく無異なりしに、神餘が嬖臣山下定包、奸計をもて主を戕ひ、忽地二郡を横領し、推て國主と稱すれども、神餘が為にこれを討ず、阿容阿容と下風に立て、共に濁を受給へば

民の誹謗も宜ならずや。某この事を申ッ入れて、用らるゝこともあらは、犬馬の勞を竭ん、と思ひしはそらだのめにて、出陣の準備も見えず、絶てその議に及れねば、寸志を演るよしもなし。わが主従の剛膽のみ、只管批評せらるれ共、神餘が為に定包を、討ざるは勇もなく、義もなき武士は憑しからず、今はしも是まで也。罷出た」といひあへず、席を去んとし給へば、景連急に呼とめ、「方寸を告ぐれば、さおもはるゝも埋り也。今霎時坐して給へ」ととむる右手へ立違る。信時は些も擬議せず。「しらすや義美、けふわがこゝに來たりしは、をさへ軍議の為なれど、謀は密なるをよとす。はじめて面を見る和主、かろくしく何をか告ん。俺們が勇ありや、なしやをみづからしらんとならは、まじこの刃に問かして」と敦園ながら反つちかへず、刀の鞘に手を掛れば、さらでも由断せざりける、氏元も眞行も、主のほとりに衝と寄て八方へ眼を配れば、麻呂が従者二人を見て、握る拳を擦あへず、頻りに膝を進めたり。そのときあるじ景連は、慌忙き横ぐらまに、信時を抱き禁め、耳に口をさし著て、何事やらん説論し、馳て左右を見かへりて、頤をもてしらすれば、安西が近臣等、麻呂が従者も共、遽しく立かへりて、次の房へ伴ひぬ。かへりけれども義美は、扇の扇目走らしながら、うち見たるのみ争す、席上ますへ失興にけり。

當下安西景連は、舊の処にかへりをり、「義美何とか思ひ給ふ。一言の下に死を争ふは、武士の風俗なれども、麻呂氏は戯れ也。こゝろになかけれそ。しかれども、時と勢をしるものは、堪忍ぶをもて危からず。かくはしばし試みたるに、和殿は寔にその人なるべし。よしや結城の守將なりとも、今この浦に流浪ひて、わが一陣に走加り、彼定包を討たならば、わが軍令に背きかたけん。士卒と共に忠を抽、戦場に大功あらは、恩賞の沙汰なからんや。素性に誇り、才を憑み、わが手に屬を愧るとならば、これ軍令に背くもの也。さでは決して用ひがたし。和殿一己のちからをもて、彼賊をつち滅し、灌田の城を取りぬかし。一郡のぬしにならるゝとも、露ばかりも憾なく、かへればゆくも留るも、只この一議にあらんのみ。心を定めて回答させよ」と辭もこゝろに更ぬ。難義としれど些もいならず、「繫ぬ舟となりしより、よるへの岸こそ身のぬしなれ。こゝろに庇覆を蒙りて、用ひるゝとめらば、何事を嫌ふべき。うらなく仰候へ」といはれて景連うち點頭、「しからば事のはじめ也。努々違背あるべからず。わが家の嘉例として、出陣の首途に、軍神を祭ることあり。その昨には大きな鯉魚を備ることになん。わが為に鉤をおろして、この鯉を釣もてかへらば、よき敵と組撃して、頸を得たるに同かるべし。こゝろ得たりや」と説示せば、義実固辭けしきなく、「羨り候ひぬ」と應てやがて立んとせし、主の後方に侍りたる、氏元眞行は左右より、その袂を引とめて、両人齊に進み出、安西公へ申す也。嘉例とは宜んども、竿を斜にして舟に

睡り、鉤を下して魚を捕る、その智は漁夫にますものなし。これらは武士のせざる所、義実には似けなき技也。君はつかしめらるゝときは、臣死すところ古人もいへ。只僕等が首をもて、昨となし給へかし」といはせも果す景運は、氏元等を信と疾視、「彼奴甚不礼也。義実は法度をおそれ、既に兼諾せし事を、化耳抜して何と聞たる。その家僕として憚なく、わが軍令を犯したる、罪尤輕からず。彼牽出して斬て棄よ」と烈しき怒りを物ともせず、氏元貞行ますゝ進みて、説果さんしたりしかば、義実これをいたく叱りて、問達に返せ、彼等が為に暗語給へは景運やつやく氣色をおさめ、「しからは鯉を見るまでは、彼奴等を和殿にあづけん。和殿手親釣もて来よ、それも三日に限るべし。等閑にして日を過さば、白物等がつへのみならず、こゝろ得てよ」と他事もなく、いはるゝ毎に義実は、恭しく領諾し、「しからは旅宿入まからん」とて、つらみ兒なる老黨を、いそがし立て出給へば、次の房に竊聞たる、麻呂小五郎信時は、綾子障子を開かして、冷笑ひつゝ且く目送り、あるじのほとりへ立寄て、「安西ぬしいと手ぬるし。なとて里見が従者等を、助けてかへし給ひたる。われは只管義実を、撃果さんとしつれども、和殿が盾となり給へば、網裏の魚を走らしたり」と嘲がましく咬けは、景運聞てうちほく笑み、「われも又はじめより、用意はしたれども、義実は名家の子なり、小冠者なれども思慮才学、凡庸のものにあらず。又従者等が面魂、一人當千といふべき状。さるを漫に手を下さば、こゝにも夥人を殺さん。獸窮すれば必囓、鳥窮すれば必啄く。況、勇將猛卒なり。徒手を束て刃を受んや。窮鳥、懐に入るときは、獵師も捕らずといふなるに、今定包を討すして、怨なき人を殺さば、民の誹謗は日にまして、遂に大事を成がたかるべし。さればとて義実を、この処へ留めては、猛獸を養ふごとく、早晚寤寐安からず。こゝをもて、首鼠兩端に言をよせて、彼主従が雅慢を壓、祭祀の誓を求めしは、陷阱を造るもの也。安房一國には鯉を生せず。はその風土によるもの状。彼奴等これをしらずして、淵に立、瀬に涉獵、いたづらに日を過し、手を空してかへり來ば、軍法をもてこれを斬ん。かくては殺すもその罪あり。わが私といふへからず。われ豈彼を助んや」と誇兒に説示せば、信時は笑坪に入て、掌を丁と鼓、「謀得て極て妙也。現愁に撃走らし、義実瀧田に赴きて、定包に従はゞ、虎に翼を添る也。さりてこなたに用ひなば、庇を貸て母屋を損ぶ、悔なしとはいひがたし。留て後にこれを殺す、謀にますものなし。吁奇なるかな、妙なり」と只管賞嘆したりける。かゝりし程に義実は、白濱なる旅宿へとて、歩の運をいそがし給へど、途いと逢なりければ、かへりも著かで日は暮たり。

抑安房の白濱は、朝東郡の内にして、『和名鈔』にその名見えて、いと舊たる郷になん。瀧口村

に接といふ。今は七浦と唱るのみ、この濱辺の摺名なり。里見氏の舊址、その寺などもここにあり。所謂安房の七浦は、川下、岩目、小戸、塩浦、原、之濱、白間津是也。

間話はさておきつゝ、義美は、その暁かたに、白濱へかへりつゝ、目睡もせて漁獵の、用意をし給へは、氏元貞行勸はず、「君なほ暁り給はずや。信時は匹夫の勇者、景連は能を忌み、才を媚て甚憚り。我を見ること仇のごとく、憑しげなき人の為に、鯉をあさりて何にかはせん。はやく上総へ赴きて、その毒害を避給へ」ともる共に諫しかば、義美頭をうち掉て、「否、你達が異見はたがへり。麻呂安西が人となり、利には親く、義に疎かり。口と行はうらうらにて、定包をおそるのみ。灘田を討のころなく、としらざるにあらねども、こんを避て上総へ赴き、彼処も又如此ならば、下総は敵地也。そのとき何処へ赴くべき。君子は時を得て樂み、時を失ふても亦樂む。田尚は世にいふ太公望是なり。齡七十に傾くまで、よに人のしるものなし。涓濱に釣して文王に値偶し、紂王を討滅して大功あり。齊國に封られて、子孫數十世に傳へたり。太公望すらかくのごとし。われは時と勢と、両ながら失ふもの也。釣する事を嫌んや。且鯉はめでたき魚也。傳聞安南龍門の鯉、瀑布に沂るときは、化して龍になるといへり。われ三浦にて龍尾を見たり。今白濱へ來るに及びて、人又鯉を釣といふ。前象後兆憑しからずや。獲あらは齎して、景連がせんやうを、姑く見んと思ふかし。暁なば出ん」といそがし給へば、氏元も貞行も、その高論に感服して、釣を求め、竿をととのへ、割籠を腰に括著て、主従三人名もしらぬ、淵をたづねてゆく程に、森の烏も梢をはなれて、天はほのへくと明にけり。